
研究報告

医療看護研究31 P.22-32 (2023)

全国の看護系大学看護学教員を対象としたポートフォリオの 理解、認識、使用状況に関する実態調査

A Fact-finding Survey on the Understanding, Recognition, and Usage of Portfolio for Nursing Faculty Members at Nursing Colleges and Universities Nationwide

松尾 絵美子¹⁾
MATSUO Emiko

永野 光子²⁾
NAGANO Mitsuko

野崎 真奈美²⁾
NOZAKI Manami

要 旨

本研究の目的は、全国の看護系大学に勤務する看護学教員のポートフォリオに関する理解、認識、使用状況の実態を明らかにすることである。方法は、全国の看護系大学の看護学教員を対象とした無記名のWeb調査（横断研究）とし、分析にはSPSSを用いて、記述統計量の算出、Mann-WhitneyU検定を行った。有意水準は5%とした。

看護系大学61校の看護学教員1,673人に調査を依頼した結果、236人の回答が得られ（回答率14.1%）、233人を分析対象とした。ポートフォリオという名称は、約99%が聞いたことがあるが、ポートフォリオの理解には個人差があり、2020年度の担当科目への導入率は約35%であった。半数が組織からの推奨で導入し、書籍や学内の研修会から知識を習得後、一定の知識に基づき指導を実施していることがうかがえた。しかし、領域を超えたポートフォリオの連動は限定的で、科目の成績評価にポートフォリオが活用されていない現状が明らかとなった。

質を保証したポートフォリオの普及、有効活用のためには、関与する全ての人の共通認識、導入や使用が動機づけられる機会やサポートの提供、看護学に適用できる様式の工夫、自己調整学習能力を育成するための関わり、学務情報システム・学習管理システム（LMS）との一括管理によるデジタルトランスフォーメーション（DX）を進展させた有機的なeポートフォリオへの転換の必要性が示唆された。

キーワード：ポートフォリオ、看護系大学、看護学教員、全国調査

Key words : portfolio, nursing colleges and universities, nursing faculty members, national survey

I. 緒言

看護教育の内容と方法に関する検討会報告書は、臨

地実習では学生がどのように対象者に関わり、どのような学びを得たかを教師と学生双方が共通に認識できるようにする必要があると、体験した内容や獲得した能力を記載したもの（ポートフォリオなど）を活用することが効果的であると提案している（厚生労働省、2011）。ポートフォリオとは、学習過程ならびに学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のため

1) 東京医療保健大学医療保健学部
Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

2) 順天堂大学大学院医療看護学研究科
Graduate School of Health Care and Nursing, Juntendo University
(Sep. 30. 2022 原稿受付) (Dec. 21. 2022 原稿受領)

に収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表などの学習成果を長期にわたって収集したものである(文部科学省, 2012)。一般的には、学習過程や学習成果から知識・技能の到達状況を自己評価するツールとして捉えられているが、Smith (2012) は、学びの蓄積を有効活用することで起こる「フォリオシンキング (folio thinking)」によって、学習者は学びを心の内に留め、自分の知識にまで高める「深い学習 (deep learning)」が導き出されると述べている。

ポートフォリオは、使用する者に応じて、学生の学習成果を測るための学習ポートフォリオや教員の教育業績のためのティーチング・ポートフォリオ、その目的や方法によってキャリア・ポートフォリオやeポートフォリオなどの多様な種類が存在している。また、看護基礎教育分野では、〈学習成果の可視化・成長の実感・モチベーション〉、〈ふり返り・リフレクション・自己評価〉、〈課題の明確化〉、〈周囲との共有〉などの活用効果が示されている(石堂 他, 2020)。一方で、〈活用のための準備・説明が必要〉、〈記録することの負担〉、〈運用基準の不備〉などが課題となっており(石堂 他, 2020)、学生の主体性だけではポートフォリオの記載や活用は不十分であり、継続的な教員の支援体制が必要であるとの意見もある(坂上 他, 2013)。

国公立大学2,376学科(看護系大学を含む)に実施した主体的な学習を促す教育方法の調査においては、プレゼンテーションや調査学習の実施率が約70~80%であったのに対し、ポートフォリオの導入は全体の20%にとどまり、そのうち20%しか「特に有効な取り組みである」と感じていないことが報告されている(ベネッセ教育総合研究所, 2013)。このようにポートフォリオ活用の効果や学生への支援の必要性が謳われる一方で、実際の活用度は低く、看護系大学教員のポートフォリオに関する理解、認識、使用状況についての報告は見当たらない。

そこで本研究では、全国の看護系大学に所属する看護学教員のポートフォリオに関する理解、認識、使用状況について明らかにする。これらの知見を得ることは、看護学教員を取り巻くポートフォリオの現状を総体的に把握することにつながり、看護系大学における質を保証したポートフォリオの普及と活用を推進するための資料となると考えた。

II. 目的

本研究の目的は、全国の看護系大学における看護学

教員のポートフォリオに関する理解、認識、使用状況の実態を明らかにすることである。

III. 用語の定義

本研究における用語の定義を以下のように示す。

1. ポートフォリオに関する理解

ポートフォリオという名称を聞いたことがあったかどうか又は聞いたことのあるポートフォリオの種類について知っていることとする。

2. ポートフォリオの使用状況

担当している科目におけるポートフォリオを用いた授業形態の種類、ポートフォリオの形式、科目の評価への活用状況、学生へのフィードバック方法、ポートフォリオ提出義務の有無などのポートフォリオを使用する際の看護学生及び看護学教員の状態をさす。

3. ポートフォリオに関する認識

ポートフォリオを担当科目に導入している看護学教員のポートフォリオに期待する機能についての考え又はポートフォリオという名称を聞いたことのある看護学教員が感じているその人なりの理解の程度をさす。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

無記名自記式質問紙を用いた横断研究(Web調査)である。

2. 研究対象

全国の看護系大学に所属する看護師免許を有した常勤の看護学教員とした。

3. データ収集方法と調査期間

日本看護系大学協議会(2020)会員校(大学一覧)に掲載されている全287校の看護学科長宛に調査依頼の文書を郵送した。調査協力の承諾が得られた大学には、Google社のアプリケーションであるGoogleフォームにアクセスできるURLやQRコードを掲載したメールを送信し、当該メールの調査対象者への配信を依頼した。調査期間は、2021年5月~2021年8月であった。

4. 調査内容

調査内容として、対象の基本属性、ポートフォリオの認知度、理解度、導入・使用・活用状況、認識について71の質問項目を自作した。ポートフォリオに期待する機能に関する質問は、鈴木（2019）の提唱するポートフォリオ8機能の項目を参考にした。71項目は、2項回答法、多項回答法、複数回答法、5段階のリッカートスケールで回答を求め、看護系大学に常勤として勤務する看護学教員8人にパイロットスタディを実施し、表面妥当性・内容妥当性について検討した上で、看護基礎教育と看護研究に精通した看護学教員のスーパーバイズを受け修正を行った。本論文では調査内容の一部について報告する。

5. 分析方法

分析は、SPSS Statistics 28を用いて、基本属性と各調査項目の記述統計量を算出した。ポートフォリオ導入の有無によって、ポートフォリオに対する自己判定による知識の程度に差があるかどうかは、Mann-WhitneyU検定を実施した。有意水準は5%とした。

V. 倫理的配慮

本研究は、順天堂大学大学院医療看護学研究科研究等倫理委員会の承認を得て実施した（順看倫2021-80号）。研究に協力しない場合でも不利益は被らないこと、回答内容により教育力を批判・評価するものではないこと、答えたくない内容には回答しなくても良いことを明記の上、協力の意思のある者が個別にGoogleフォームへ回答することで任意性を保障した。さらにGoogleフォームを無記名かつ、個人登録の必要がない方法に設定することで匿名性を保障した。また、個人情報やプライバシー保護などの法令を遵守することを依頼文書に明記した。

VI. 結果

1. 対象者の概要（表1）

61校の看護学教員1,673人に調査を依頼し、236人の回答が得られた（回答率14.1%）。Googleフォームの誤操作による重複回答と考えられる回答3件を分析対象から除外し、233人の回答（有効回答率：98.7%）の分析を行った。対象者の基本属性の概要を表1に示す。

表1 対象者の基本属性

		(N = 233)	
構成要素	項目	N	%
性別	男性	33	14.2
	女性	199	85.4
	無回答	1	0.4
年齢	25歳以上34歳以下	26	11.2
	35歳以上44歳以下	69	29.6
	45歳以上54歳以下	74	31.8
	55歳以上	64	27.5
	無回答	7	3.0
看護学教育での最終学歴	看護系専門学校	17	7.3
	看護系短期大学	10	4.3
	看護系大学	30	12.9
	看護系大学院	165	70.8
	その他	4	1.7
看護学教育以外での最終学歴	無回答	7	3.0
	高等学校	93	39.9
	保健学系（大学・大学院）	21	9.0
	福祉学系（大学・大学院）	12	5.2
	医学系（大学・大学院）	30	12.9
	教育学系（大学・大学院）	19	8.2
看護学教員としての経験年数	その他	21	9.0
	無回答	37	15.9
	3年未満	34	14.6
	3年以上6年未満	42	18.0
	6年以上10年未満	41	17.6
現在の職位	10年以上	116	49.8
	教授	51	21.9
	准教授	54	23.2
	講師	45	19.3
	助教	71	30.5
専門の看護学領域	助手	12	5.2
	基礎看護学	53	22.7
	成人看護学	40	17.2
	老年看護学	20	8.6
	母性看護学・助産学	32	13.7
	小児看護学	17	7.3
	精神看護学	17	7.3
	地域看護学	25	10.7
	在宅看護学	17	7.3
	その他	7	3.0
所属している大学の種別	無回答	5	2.1
	国立・公立・省庁	94	40.3
	私立	137	58.8
所属している大学の形態	無回答	2	0.9
	総合大学（5学部以上）	101	43.3
	小規模大学（2～4学部）	107	45.9
看護学科の1学年の定員数	看護系単科大学	25	10.7
	99人以下	135	57.9
	100人以上	95	40.8
所属している大学の所在地	無回答	3	1.3
	北海道・東北	9	3.9
	関東	73	31.3
	中部	51	21.9
	関西	30	12.9
	中国・四国	29	12.4
九州・沖縄	41	17.6	

注) 構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない

2. ポートフォリオに関する理解 (表2、図1)

ポートフォリオという名称を聞いたことがあったかという全対象者向けの質問では、〔聞いたことがあった〕99.1%、〔聞いたことがなかった〕0.9%という結果であった。そのうち、〔聞いたことがあった〕と回答した者が、聞いたことのある種類は、〔学習ポートフォリオ (ラーニング・ポートフォリオ)〕が88.2%と最も多く、〔ティーチング・ポートフォリオ〕38.0%、〔凝縮ポートフォリオ〕8.7%、〔元ポートフォリオ〕は3.9%であった。

表2 ポートフォリオの認知率

(N = 233)

構成要素	項目	N	%
ポートフォリオという名称	聞いたことがあった	231	99.1
	聞いたことがなかった	2	0.9

3. ポートフォリオの導入及び使用状況 (表3、表4)

ポートフォリオを2020年度の担当科目に導入している者 (以下、導入あり群) は34.8%、導入していなかった者 (以下、導入なし群) は65.2%であった。そのうち導入なし群にポートフォリオを導入しなかった理

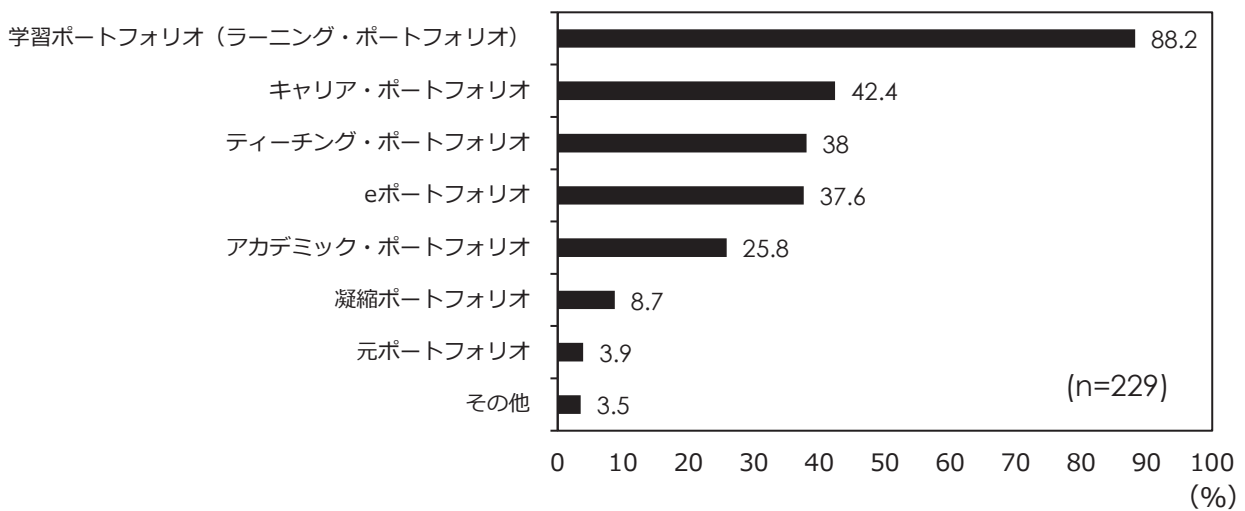


図1 聞いたことのあるポートフォリオの種類 (複数回答)

表3 ポートフォリオ導入の状況

構成要素	項目	n	%
担当科目へのポートフォリオ導入の有無 (n = 230)	あり	80	34.8
	なし	150	65.2
担当科目にポートフォリオを導入しなかった理由 (n = 150)	ポートフォリオに関する知識がない	42	28.0
	カリキュラムへの導入や教育方法を決定する権利がない	52	34.7
	面倒くさそう	3	2.0
	負担が大き	15	10.0
	学習の効果が得られにくそう	10	6.7
	その他	24	16.0
	無回答	4	2.7
担当科目にポートフォリオを導入した理由 (n = 37)	組織全体からの使用の推奨	18	48.6
	上司・同僚・知人からの推奨	4	10.8
	研修会への参加が契機	7	18.9
	学会・論文・書籍・雑誌などからの影響	5	13.5
	自分自身の使用の経験	1	2.7
	その他	1	2.7
	無回答	1	2.7
導入時の科目責任者からのオリエンテーションの有無 (n = 43)	あり	29	67.4
	なし	14	32.6

注) 構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない

由を尋ねたところ、〔ポートフォリオに関する知識がない〕28.0%、〔カリキュラムへの導入や教育方法を

決定する権利がない〕34.7%、〔負担が大きい〕10.0%、〔学習の効果が得られにくそう〕6.7%であった。

また、導入あり群の科目責任者に導入した理由を尋ねたところ、〔組織全体からの使用の推奨〕が48.6%と最多だった。導入あり群の担当者に導入に向けたオリエンテーションの有無を尋ねたところ、実施〔あり〕67.4%、実施〔なし〕が32.6%であった。

ポートフォリオを使用した授業形態は、〔講義〕51.3%、〔演習〕56.3%、〔実習〕63.8%、〔課外授業〕11.3%であった。

使用していたポートフォリオの形式は、〔ファイリング式〕67.5%、〔冊子〕31.3%、〔オンラインストレージ〕11.3%、〔eポートフォリオシステム〕23.8%であった。

科目の成績評価への活用は、〔ポートフォリオは評価に含めない〕48.8%、〔形成的評価に活用〕21.3%、〔総括的評価に活用〕33.8%、〔ポートフォリオ自体のパフォーマンス評価に活用〕5.0%であった。

ポートフォリオに関する知識の習得方法は、〔書籍〕が57.5%と最も多く、次いで〔学内の研修会〕47.5%であった。

ポートフォリオを使用した担当科目数は、〔1科目〕42.5%、〔2科目〕25.0%だった。

学生へのフィードバック方法は、〔紙面への記入や画面への入力でのコメント〕50.0%、〔口頭でのコメント〕17.5%、〔フィードバックはしない〕17.5%、〔面接による対話〕12.5%であった。

ポートフォリオの提出義務は、〔あり〕75.0%、〔なし〕25%であった。

ポートフォリオ同士の連動は、〔連動なし〕40.0%、〔自分の所属する看護学領域の複数の科目と連動〕26.3%、〔他の看護学領域の科目と連動〕8.8%、〔ほとんどの科目との連動〕7.5%、〔わからない〕13.8%であった。

表4 ポートフォリオの使用状況

		(n = 80)	
構成要素	項目	n	%
授業形態	講義	41	51.3
	演習	45	56.3
	実習	51	63.8
	課外授業	9	11.3
	その他	3	3.8
形式	ファイリング式	54	67.5
	冊子	25	31.3
	オンラインストレージ	9	11.3
	eポートフォリオシステム	19	23.8
科目の評価への活用	評価に含めない	39	48.8
	形成的評価に活用	17	21.3
	総括的評価に活用	27	33.8
	ポートフォリオ自体のパフォーマンス評価	4	5.0
	その他	1	1.3
	無回答	1	1.3
知識を習得した方法	書籍	46	57.5
	雑誌	20	25.0
	学会発表	6	7.5
	論文	14	17.5
	研修会(学内)	38	47.5
	研修会(学外)	16	20.0
	その他	3	3.8
ポートフォリオを使用した科目数	無回答	5	6.3
	1科目	34	42.5
	2科目	20	25.0
	3科目	11	13.8
	4科目	6	7.5
学生へのフィードバック方法	5科目以上	9	11.3
	フィードバックはしない	13	16.3
	口頭でのコメント	14	17.5
	紙面への記入や画面への入力	40	50.0
	面接による対話	10	12.5
ポートフォリオの提出義務	その他	3	3.8
	あり	60	75.0
他のポートフォリオとの連動	なし	20	25.0
	連動なし	32	40.0
	自分の領域の複数科目との連動	21	26.3
	他の領域の科目と連動	7	8.8
	ほとんどの科目との連動	6	7.5
	わからない	11	13.8
	その他	1	1.3
	無回答	2	2.5

注1) 上から4番目までの構成要素は、複数回答可とした
 注2) 上から5番目以降の構成比は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない

4. ポートフォリオに関する認識 (表5、表6、表7)

ポートフォリオが果たしうる機能には、【意識化】【一元化】【俯瞰】【顕在化】【価値化】【行動化】【フィードバック】【ストーリー化】の8項目があるとされている(鈴木, 2019)。これらの機能のうち、〔期待している〕〔どちらかといえば期待している〕と回答した者が80%を超えている項目は、【意識化】【一元化】【俯瞰】【フィードバック】であった。

ポートフォリオ導入あり群では、ポートフォリオに

表5 ポートフォリオに期待する機能

(n = 80)

項目	期待している		どちらかといえば期待している		どちらともいえない		どちらかといえば期待していない		期待していない		わからない		無回答	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
【意識化】	29	36.3	40	50.0	5	6.3	3	3.8	1	1.3	2	2.5	0	0.0
【一元化】	34	42.5	33	41.3	7	8.8	3	3.8	0	0.0	2	2.5	1	1.3
【俯瞰】	37	46.3	35	43.8	5	6.3	3	3.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0
【顕在化】	24	30.0	32	40.0	15	18.8	5	6.3	2	2.5	2	2.5	0	0.0
【価値化】	20	25.0	35	43.8	15	18.8	7	8.8	1	1.3	2	2.5	0	0.0
【行動化】	27	33.8	34	42.5	11	13.8	7	8.8	0	0.0	1	1.3	0	0.0
【フィードバック】	36	45.0	32	40.0	6	7.5	3	3.8	2	2.5	1	1.3	0	0.0
【ストーリー化】	17	21.3	35	43.8	17	21.3	8	10.0	0	0.0	3	3.8	0	0.0

注1) 項目の用語を以下で説明する

- 【意識化】ビジョン、ゴール、テーマを常に意識することができる
- 【一元化】バラバラの情報を一元化することができ、思考をたどる拠りどころとなる
- 【俯瞰】全体と部分の関係が見える、プロセス全体が客観的に見える
- 【顕在化】テキスト（文字データ）や文書だけではなく、人間的な要素や感性、能力が見え暗黙知が顕在化する
- 【価値化】経験に潜む意味を考え解釈する、比較、相違、関係、関連が見える
- 【行動化】ポートフォリオに現実や経験を入れることが、新たな行動を促すことにつながる
- 【フィードバック】成果、成長を顕在化し、数値化できない評価をする
- 【ストーリー化】ポートフォリオをめぐることで情報、思考、判断、行動などを文脈で捉えることができる

注2) 構成比は小数点以下第2位を四捨五入しているため、合計しても必ずしも100とはならない

表6 ポートフォリオ導入の有無とポートフォリオに対する自己判定による主観的な知識の程度の状況

(n = 230)

		ポートフォリオに対する自己判定による主観的な知識の程度							
		知っている	どちらかといえば知っている	どちらともいえない	どちらかといえば知らない	知らない	わからない	合計	
ポートフォリオの導入	あり (導入あり群)	n = 14 (17.5%)	38 (47.5%)	18 (22.5%)	10 (12.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	80 (100%)	
	なし (導入なし群)	n = 9 (6.0%)	42 (28.0%)	42 (28.0%)	43 (28.7%)	8 (5.3%)	6 (4.0%)	150 (100%)	
	合計	n = 23 (10.0%)	80 (34.8%)	60 (26.1%)	53 (23.0%)	8 (3.5%)	6 (2.6%)	230 (100%)	

表7 ポートフォリオ導入の有無によるポートフォリオに対する自己判定による主観的な知識の程度の比較

項目	導入あり群 n = 80			導入なし群 n = 144			p値	有意差
	中央値	最大値	最小値	中央値	最大値	最小値		
ポートフォリオに対する主観的な知識の程度	4.0	5	2	3.0	5	1	< .001	***

注) Mann-Whitney U検定

***p < .001

対して「知らない」「わからない」と回答した者はいなかったが、「どちらかといえば知らない」と回答した者が12.5%いた。また、導入なし群は、ポートフォリオについて「どちらかといえば知っている」28.0%、「どちらともいえない」28.0%、「どちらかといえば知らない」28.7%とほぼ同値を示していた。さらに、ポートフォリオの導入の有無によって、ポートフォリオに対する自己判定による主観的知識の程度に差がある

かを Mann-Whitney U検定を用いて分析した。その結果、有意差が認められ (U = 3,644, p < 0.5)、ポートフォリオを担当科目に導入している教員の方が、導入していない教員よりも、自己判定による主観的な知識の程度（その人なりに感じている理解の程度）が高いことが明らかになった。

VII. 考察

本研究では、全国の看護系大学における看護学教員のポートフォリオに関する理解、認識、使用状況の実態が調査結果より明らかになった。これらの実態について考察し、これからの看護基礎教育におけるポートフォリオの普及と活用推進に向けた課題について論考する。

1. 看護学教員を取り巻くポートフォリオの実態

1) ポートフォリオに関する理解

ポートフォリオという名称は、約99%が聞いたことがあると回答し、全国の看護系大学の看護学教員にその名称は広く知られていることが明らかとなった。また、ポートフォリオの中で最も知られていたものは、学習ポートフォリオ（ラーニング・ポートフォリオ）で、約90%が聞いたことがあると回答していた。これは、看護教育の内容と方法に関する検討会報告書（厚生労働省，2011）や学士課程教育の構築（答申）（文部科学省，2008）などでも学習ポートフォリオの使用が推奨されていることから広く知られていたものと考えられる。一方で、情報や考えたことを時系列に入れプロセスを評価できる〔元ポートフォリオ〕や論理的思考力、課題解決力を総括的評価で判断するための〔凝縮ポートフォリオ〕などの発展的なポートフォリオは、4～9%の人しか聞いたことがなかった。ポートフォリオという名称を聞いたことはあるが、ポートフォリオのことを〔どちらかといえば知らない〕〔知らない〕〔わからない〕と回答した者が約30%いたことからも、多種多様なポートフォリオの種類や具体的な内容の理解には個人差があると推察される。

2) ポートフォリオの使用状況

2020年度の担当科目にポートフォリオを導入していた看護学教員は約35%であった。ベネッセ教育総合研究所（2013）の調査では、大学でのポートフォリオの導入率は20%前後であったとの報告がある。本調査は、教員個人の導入状況を調査していることから一概に比較対象とはならないが、ポートフォリオを導入している看護学教員は一般の大学教員よりもやや多いと推察される。近年の看護基礎教育領域のポートフォリオに関する文献総数の増加からも（石堂 他，2020）、この10年間でポートフォリオは看護系大学にある程度普及し、その期待も高まっていることが示唆された。

ポートフォリオを用いた授業形態は、講義・演習・実習のそれぞれが50～60%と偏りはなかった。しかし、

ポートフォリオを使用した科目の担当が〔1科目〕の者が全体の40%強であり、〔自分の領域の複数科目との連動〕をしていたと回答している者が約25%にとどまっていたことから、同じ領域の科目間の学びをポートフォリオでつなぎ蓄積させる使用状況にはないことがうかがえる。また、〔他の領域との連動〕や〔ほとんどの領域との連動〕といった領域を超えての連動も15%程度と限定的であり、組織的な使用状況にないことが推察される。組織主導によるポートフォリオのシステム化は、普及や活用促進のための一助になると考えられる。しかしSmith（2012）は、学生は専門分野での学習経験を積み重ねることで、領域を超えた本質的な原理や技術経験について発見することができるようになる」と述べており、単体のポートフォリオにおいても学習内容や経験を丁寧に積み上げ、振り返りに活用することで、一定の学習の転移は促進するものと推察される。看護学教員各々が、ポートフォリオの内容を看護学に適用させ、意味づけられるような様式の工夫と内容の改善を図っていくことがポートフォリオの質を高める上で重要と考える。

次に使用状況で最も特徴的だったのは、科目の成績評価にポートフォリオをどのように活用したかの質問に対して、ポートフォリオを〔評価に含めない〕と回答した者が半数を占めていたことである。文部科学省（2008）は、学生が自らの学習成果の達成状況について整理・点検するとともに、これを大学が活用し、多面的に評価する仕組み（いわゆる学習ポートフォリオ）の導入と活用を検討することを提言している。しかし、10年以上経過した本調査の時点でもポートフォリオを評価に含めていない者が半数を占め、さらに〔形成的評価に活用〕していた者が約20%、〔総括的評価に活用〕していた者が約30%と低い水準であった。もともと、学習ポートフォリオ（ラーニング・ポートフォリオ）は学習成果を測るうえで、他のどの試験方法よりも優れ、その測定範囲も広範であるにもかかわらず、客観的評価に乏しい、あるいは評価に手間がかかるなどの理由から採用されてこなかった歴史がある（土持，2009）。しかし近年では、学生が何を学習するかを示す評価基準と学生が学習に到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリックス形式で示す評価指標としてのルーブリックが注目されており、前山ら（2016）は、母性看護学実習にプロジェクト学習とポートフォリオ評価、ルーブリックを導入した結果、主体的に学修するという習慣や動機づけの刺激、さら

に学生の形成的評価に活用でき、到達目標の達成を果たすことができたことを論じている。このことからルーブリックを用いた評価を習慣化し、多面的な評価へと発展させていくことが有意義な活用につながると考えられる。

3) ポートフォリオに関する認識

今回の調査において、ポートフォリオ導入あり群の方が導入なし群よりも自己判定による主観的な知識の程度が有意に高値を示していたことから、看護学教員の大部分はポートフォリオに関する一定の知識や理解の下で指導を行っていたと推察できる。しかし、導入あり群である80人中10人が、ポートフォリオに関して「どちらかといえば知らない」と回答していた。また、ポートフォリオを科目で導入する前に「科目責任者等からオリエンテーションを受けていない」と回答した科目担当者も30%程度存在している。ポートフォリオが強力な教育改善の「ツール」たりえるためには、導入目的と必要性の明確化と学内的なコンセンサスが必須であると述べられているように（岩井, 2013）、関与する全ての人が使用するポートフォリオへの共通認識を持てるよう、カリキュラム・マネジメントを前提としたポートフォリオの考え方を周知徹底し、その後の定期的なフォロー体制を構築していくことが重要と考えられる。

一方、ポートフォリオ導入なし群にポートフォリオを導入しなかった理由を尋ねたところ「ポートフォリオに関する知識がない」と回答した者は約30%であった。また、自己判定による主観的な知識の程度として、「どちらかといえば知っている」「どちらともいえない」「どちらかといえば知らない」の回答がほぼ同値を示していた。この結果から、導入なし群の自己判定による主観的な知識の程度にはバラつきがあり、導入の如何はポートフォリオに関する知識によるものではないと推察される。「負担が大きい」「学習の効果が得られにくそう」「必要性を感じていない」などのネガティブな回答も一定数あったことから、導入に際して何らかの障壁を感じている者も存在することがうかがえる。こういった障壁を感じている者に対しては、導入前中後も安心してサポートを受けられる窓口の設置やマニュアルの作成、ポートフォリオに対するネガティブな認識を好転させ、導入を動機づけられるような機会を設けることが重要である。知識を習得することにとどまらない教員自身が主体的に取り組める、例えば自分自身のティーチング・ポートフォリオを作成す

るようなワークショップ型の研修などの開催も有効と考えられる。

また、ポートフォリオに期待する機能としては、【意識化】【一元化】【俯瞰】【フィードバック】に対する期待の高さがうかがえた。【意識化】とは、ビジョンとゴールを明確にし、課題発見のセンサーを研ぎ澄ますことである（鈴木, 2019）。看護基礎教育の科目においては、ビジョンとゴールである学習目標と到達目標が事前に教員によって提示されている場合が多い。しかしSchunkは、目標の自己設定とその達成により自己効力感が向上することを見出し（小田, 2008）、本調査でも学生自身が主体的に目標を見出すことへの期待が大きかったものと想像できる。また、散在していた学習に関する情報を集め、その認知や知識を【一元化】すること、学習プロセスの全体と部分を客観的に【俯瞰】するといった機能は、学生が自己の学習プロセスをメタ認知するために重要な役割を担うと考えられる。メタ認知は、「認知」をもとに修正を加えることで「省察」するものであるように（土持, 2009）、他者からの【フィードバック】を受け取ること、さらに「省察」を促進させることをねらいとしていたと推察する。このように、【意識化】【一元化】【俯瞰】【フィードバック】といった機能を有効活用することで、学習におけるリフレクション（省察）とインテグレーション（知識・態度の統合）を促進し、学習者としての成長を説明・予見させる深い学習を導き出す「フォリオシンキング (folio thinking)」(Smith, 2012) 醸成への期待がうかがえた。しかし、学生自身がポートフォリオを有効活用するためには、それぞれのニーズに合致したポートフォリオであると共に学習活動に能動的に関わるための行動変容が求められる。こういった自らの学習を調整する自己調整能力の発達においては、学習者を取り巻く環境が重要であり、教師の教授行動が強い影響をもたらすといわれている（岡田, 2019）。ポートフォリオの記載にあたっては、学生任せにせず教員が定期的に介入し、思考をゆさぶる発問をするなどの自己調整学習の能力育成にむけた関わりが重要と考える。

2. 看護基礎教育現場におけるeポートフォリオ推進にむけて

本調査において、ICTを中心に据えたeポートフォリオシステムを導入している看護学教員は、25%程度にとどまり、使用しているポートフォリオの形式は、

ファイリング式が70%、冊子が30%程度と大多数が紙媒体であることが明らかとなった。

また、ポートフォリオを用いて学生へ行うフィードバックは、〔口頭でのコメント〕や〔面接〕といった対面で実施している者が10%台であったのに対し、〔紙面への記入や画面への入力〕が全体の半数に及んでおり、75%の教員がポートフォリオの提出を義務づけていた。近年のコロナ禍により、対面でのタイムリーなフィードバックが制限されていることから紙媒体からeポートフォリオへの転換は急務と考えられる。

森本（2012）は、eポートフォリオは、紙媒体のポートフォリオを用いた学習の時と比べて、相互評価、他者評価などの相互作用を生かした評価活動だけでなく、自己評価までもが場所や時間帯に制限されずに容易に行うことができるため、爆発的に多くのリフレクションの誘発が期待され、eポートフォリオが学習者の自律的な学習を生起させるツールとしての役割を担うと主張している。さらに、多くの大学で使用されているコースを管理するための学務情報システム・学習管理システム（Learning Management System：以下、LMS）との組み合わせにより、学習過程のプロセスが履歴として残ること、共通のプラットフォームを使用することで、教員と学生の双方が簡便に閲覧・更新できるなどの利点もある。デジタルを活用した大学・高専教育高度化プランでは、LMS・学生ポートフォリオを入学から卒業まで一括管理し、AI技術による解析により個人に最適化された教育を実現するといった先駆的な取組みもすでに始まっている（文部科学省、2020）。このような現状に鑑み、看護基礎教育においても、教育用電子カルテ、VRコンテンツ、動画などのICT教材を用いた教育の定量的な評価とeポートフォリオが同一端末上で一元化、可視化、双方向化することで、リフレクションと個別最適な学習が誘発される可能性がある。今後は、このようなデジタル技術の活用によりポートフォリオに有機的なつながりを持たせ、単なるデジタル化にとどまらないデジタルトランスフォーメーション（以下：DX）を進展させたeポートフォリオへと転換していく必要性が示唆された。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究は、研究への参加を承諾した大学の看護学教員のみを対象にした調査であり、ポートフォリオに関心のある大学の看護学教員が積極的に回答した可能性

を否定できない。また、協力の得られた大学数、回答率ともに低いため、全国の看護系大学の看護学教員の実態を言い表すには限界がある。今後は、質問内容を厳選し、回答率を上げるなどの改善が必要と考える。

IX. 結論

ポートフォリオという名称は、全国の看護系大学看護学教員の約99%が聞いたことがあり広く知られていた。しかし、多種多様なポートフォリオの種類や具体的な内容の理解には個人差があり、2020年度の担当科目へのポートフォリオ導入率は約35%であった。ポートフォリオは組織からの推奨で導入され、看護学教員は書籍や学内の研修会から知識を習得していた。領域を超えたポートフォリオの連動は限定的であり、科目の成績評価にポートフォリオが活用されていない現状が明らかとなった。ポートフォリオ導入あり群の方が導入なし群よりも自己判定による主観的な知識の程度が有意に高いことから、ポートフォリオに関する一定の知識や理解の下で指導が行われていたと推察される。また看護学教員は、ポートフォリオの【意識化】【一元化】【俯瞰】【フィードバック】の機能を有効活用し、「フォリオシンキング (folio thinking)」を醸成することを看護学生に期待していた。使用しているポートフォリオの形式は紙媒体が多くを占め、eポートフォリオシステムを利用している者は約25%と少数であった。

以上の実態をふまえ、関与する全ての人の共通認識、導入や使用が動機づけられる機会やサポートの提供、看護学に適用できる様式の工夫、自己調整能力を育成するための関わり、LMSでの一括管理によるDXを進展させた有機的なeポートフォリオへの転換が、質を保証したポートフォリオの普及、有効活用のために必要であることが示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました大学、看護学教員の皆様に感謝申し上げます。また執筆にあたり、ご指導、ご助言いただきました皆様にも心から感謝いたします。

本研究は、2021年度順天堂大学大学院医療看護学研究所に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- ベネッセ教育総合研究所(2013). 大学生の主体的な学習を促すカリキュラムに関する調査報告書 アンケート調査編 [1] 主体的な学習を促す教育の実施状況と体制について. https://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/daigaku_syutai/enq/pdf/data_03.pdf (Dec. 6, 2020)
- 石堂たまき, 藪下八重(2020). 看護教育におけるポートフォリオ活用の動向 文献レビュー. 佛科大学保健医療技術学部論集, 14, 63-75.
- 岩井洋(2013). 特集 eポートフォリオとその活用 eポートフォリオを活用した教育改善, JUCE journal 2013年度 No.4, 2-5.
- 厚生労働省(2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 厚生労働省ホームページ. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf> (Dec. 6, 2020)
- 前山直美, 石川智子(2016). プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたループリックの導入効果. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 3, 7-14.
- 森本康彦(2012). eポートフォリオの普及. 小川賀代, 小村道昭(編) 大学力を高めるeポートフォリオエビデンスに基づく教育の質保証をめざして. pp.24-41. 東京電機大学出版局.
- 文部科学省(2008). 学士課程教育の構築にむけて(答申)文部科学省ホームページ. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf (Dec. 21, 2021)
- 文部科学省(2012). 用語解説53【学習ポートフォリオ】文部科学省ホームページ. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf (Dec. 6, 2020)
- 文部科学省(2020). デジタルを活用した大学・高等教育プラン(令和2年度第3時補正予算(案))公募説明会①. 文部科学省ホームページ. https://www.mext.go.jp/content/20201224-mxt_senmon01-000011618_1.pdf (Dec. 21, 2021)
- 日本看護系大学協議会(2020). 2020年会員校(大学一覧)2020年5月現在. 日本看護系大学協議会ホームページ. <https://www.janpu.or.jp/campaign/file/ulist.pdf> (Dec. 6, 2020)
- 岡田涼(2019). 第4章 自己調整学習における他者. 自己調整学習研究会(編), 自己調整学習－理論と実践の新たな展開へ－. pp.73-92. 北大路書房.
- 小田美穂子(2008). 17章 学業達成の援助. 坂野雄二, 前田基成(編), セルフ・エフィカシーの臨床心理学. pp.188-203. 北大路書房.
- 坂上明子, 谷本真理子, 増島麻里子, 他(2013). 看護実践能力自己評価ポートフォリオの改定に向けた取り組み. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 35, 15-20.
- Smith J. A. (2012). ポートフォリオ総論. -海外の活用から. 森本康彦(訳), 大学力を高めるeポートフォリオ エビデンスに基づく教育の質保証をめざして. pp.2-23. 東京電機大学出版局.
- 鈴木敏恵(2019). ポートフォリオで未来の教育 次世代の教育者・指導者のテキスト. 日本看護協会出版会.
- 土持ゲリー法一(2009). ラーニング・ポートフォリオ -学習改善の秘訣. 東信堂.

Research Report

Abstract

A Fact-finding Survey on the Understanding, Recognition, and Usage of Portfolio for Nursing Faculty Members at Nursing Colleges and Universities Nationwide

The purpose of this study is to clarify how the portfolio is understood, recognized, and used by nursing faculty members working at nursing colleges and universities nationwide. Data were collected through an anonymous web survey (cross-sectional study) of nursing faculty members at nursing universities across the country ; for analyses, descriptive statistics were calculated and the Mann-Whitney U test was performed using SPSS. The significance level was set at 5%.

The survey was distributed to 1,673 nursing faculty members at 61 nursing universities and 236 responses (14.1% response rate) were received, of which 233 were analyzed. Approximately 99% of respondents had heard of the term “portfolio,” but their understanding varied greatly from person to person, and its introduction into specialist subjects in the academic year Y2020 was about 35%. Half of the respondents introduced the system based on recommendations from their organizations, and after acquiring knowledge from books and on-campus training sessions, it was evident that they were implementing instructions based on a certain level of knowledge. However, the linkage of portfolios across disciplines is limited, and the current situation is that portfolios are not being used for grading courses.

In order to disseminate and effectively utilize a quality-assured portfolio, it is necessary to share a common understanding among all involved, provide opportunities and support that encourage its adoption and use, and devise a format that can be applied to nursing. The involvement in fostering self-coordinated learning skills, and need to shift to an organic e-portfolio that advances digital transformation (DX) through integrated management with the Academic Information System and Learning Management System (LMS) are also discussed.

Key words : portfolio, nursing colleges and universities, nursing faculty members, national survey

MATSUO Emiko, NAGANO Mitsuko, NOZAKI Manami